

## 平等主義に拠って立つ正義と責任

——その基本問題への解を探る——

西 口 正 文\*

Justice and Responsibility Based on Egalitarianism  
—— Questing the Solution for Its Basic Problem ——

Masafumi NISHIGUCHI

### 構成

[ $\alpha$ ] G・A・コーエン「何の平等か？ 厚生，財，潜在能力について」を手掛かりにして

（い） 平等分配の対象をめぐる論点

（ろ） “真価”（desert）をめぐる

（は） 〈運と責任〉（もしくは〈運と努力〉）をめぐる関係把握のための視軸

（に） 無責任な行為の結果への対処原則

（ほ） 責任の訴求に複雑さと困難が深まる事例

[ $\beta$ ] 正義の構成要素を再考する

（へ） パレート均衡とロールズ流「格差原理」

（と） 責任への敏感なる反応と不効率性回避の原則

《補記》 運の平等主義を挫折させようとする誘惑力としての，ひとの活動意欲にかかわる心理法則

…… “不充足理由の原理”（principle of insufficient reason）と結びつけて

[ $\alpha$ ] G・A・コーエン「何の平等か？ 厚生，財，潜在能力について」<sup>0)</sup>を手掛かりにして

### （い） 平等分配の対象をめぐる論点

ジェラルド・コーエンによるこの論文における主張は，何よりも，平等主義的正義のあり方を探求しようとする議論の舞台で，平等分配の対象が何であるべきなのかに関する知見を，刷新しようとするところにあった。コーエンが自らの主張を練りあげるにあたって何よりも重要視して格闘した議論が，アマルティア・センによる「（基本的）潜在能力の平等化」を提起した議論<sup>1)</sup>であった。以下に，コーエンによる問題化の理路を辿っておこ

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

う。

コーエンによる議論の前提として述べられているところの、平等化の指標に関するもっとも基礎的な概念区分のことを、ここであらためて採り挙げておこう。第一に、「(基本)財」が挙げられてよい。これは、各人に善き生を——暮らし向きのよさを——もたらすための素材となるものであり、多くは経済的な次元のものとして想定され得るだろう。第二に、「効用」(もしくは「厚生」)が挙げられてよい。これは、各人の善き生について特に主観的な次元での充足感という部面を指し示す。これらを踏まえて、平等分配の対象をめぐる規範理論の形態のことを考えると、「厚生の平等化」を図る、という形態が一つの候補として思い浮かぶかもしれない。だが、厚生が(もしくは効用が)主観的な次元での充足感という部面に依拠するのである点から、この形態は平等化の指標たりうるための吟味に耐えることができなくなること、これがわかる。では、「(基本)財の平等化」という形態については、どうであろうか。この形態が目標とするのは、標準化された量と質の財を素材にして、そこから標準化された効用を(厚生を)生み出すに足る充足感受性を標準化された水準で各人が持ち合わせている、という条件下で、効用を(厚生を)平等に生み出し得るための、基本財の平等な備給を、図ることである。さらに、「厚生に対する機会の平等化」という形態について、言及しておこう。この形態が目標とするのは、標準化された量と質の財から標準化された効用を(厚生を)生み出すことのできる充足感受性を、標準化された水準で各人が持ち合わせている、という条件下で、効用を(厚生を)期待値において平等に生み出し得るための選択機会を、備給することである。

上記内の「(基本)財の平等化」および(それと視座については親近性を指摘できるであろう)「資源の平等化」が、センによる新たな理説が現われるまでの段階において妥当性をもっとも認められるとみなされてきた平等主義的正義志向による理説であった、とみてよいだろう。そこに新たに提起されたところの、アマルティア・センによる「(基本的)潜在能力の平等化」説こそは、平等主義的正義志向に関するいくつかの注目すべき理説のうちでももっとも注目にあたいするものとしてコーエンの採り挙げた説なのである。この理説において平等化すべき単一の指標として想定されているのが、「(基本的)潜在能力」である。しかしこの指標として表示された語は、センがその議論を通して主張しようとする内容に最も適したものではなかったことを、コーエンは訴えかけている。センによる新たな平等化の指標を——その核心をなす内容を——、(基本)財と厚生との間にあって〈潜在的可能性を帯びてある望ましい状態〉のことだと、コーエンは解釈した上で、その指標に向けての命名として「潜在能力」は誤解を呼び起こすおそれがあると考えるので、むしろ「ミッドフェア」midfareと名指しておくことを提案する<sup>2)</sup> [Cohen, G.A. 1990: 357-371]。このことについて敷衍するために、アマルティア・センによる「(基本的)潜在能力の平等化」説の趣旨を以下で述べておこう。

「潜在能力」という語の含意として通常、受容され易いのは、次のようなものであろう。即ち、《財(もしくは資源)と効用(もしくは厚生)との間にあって働く力=諸機能の集合》を可能態として指し示す含意だ、というもの。このような含意として解される部面を、センは述べているが、そこにのみ留まるわけではない。潜在能力を次のような理由によってセンが提起する脈絡が、看過されてはならない。ひとの生活の質を——善き生としての暮らし向きを——保障するためには、(上述の意味規定のもとで言い表わされる)「諸機能の

集合」よりもむしろ、諸機能の集合という現実態に形象化されるより以前に・より基層に位置づく「潜在能力」に、各人が接近できる必要がある。ここで留意されるべきなのは、そうした接近を可能ならしめる条件の備給の下での結果としては、各人の幅をもった生活の質が一様に・パターンナリストティックに現実化するわけではなくて、各人の自律的な意思決定作用がはたらき次々に選択行為が継起することによって、多様な善き生の追求がなされ得ること（あるいはまた、善き生を破壊する行路をも採り得ること）である〔Sen, A. 1980, 1985 : chap.2, chap.4, chap.7, 1993〕。センは、保障されるべき生活の質を具象的・实际的に表現しているわけではないけれども、「基本的潜在能力の平等化」をこそ唱えようとするという着想に、善き生としての暮らし向き——効用（もしくは厚生）という側面から捉えられるのではなくて、むしろ望ましい状態として捉えられるべき暮らし向き——のための潜在的な条件の保障によって善き生の追求条件を平等化すべきだ、という根幹を成す主張が、読み取られる。

センによって提示された理説の意義をことのほか重大なものとして受け留めつつ、ジェラルド・コーエンは潜在能力概念の曖昧さを、指摘する。ある個人にとっての潜在能力とは、（センが言うように一応のところ）《財（もしくは資源）と効用（もしくは厚生）との間にあって働く力＝諸機能の集合》を可能態として指し示していると捉えるにしても、しかも、基本的潜在能力の平等化のためには財（もしくは資源）が補償されて然るべきだと考えられる場合がある（通常の場合はそうである）にしても、発揮される能力としては、その個人の身体に蓄積されて備わった能力が発揮されると捉えられるべきなのか、それとも、その個人がかかわり合う他者（たち）の能力が、その個人にとっての善き生という状態の創出を支援するかたちで、発揮されることも含めて捉えられるべきなのか、という点における曖昧さである〔Cohen, G.A. 1989 : 944, 1990 : 367-374〕。基本的潜在能力の平等化を実現するためには上記のうちの後者の捉え方を明確に打ち出すことが必要だ、とするのがコーエンの主張となる。コーエンによるこの主張は、平等主義的正義志向に基づいて客観的妥当性を帯びた〈善き生〉を——暮らし向きのよさを——もたらし得る潜在的可能態の確保として、生き易さのための条件を探ろうとする視座にとって、きわめて重要な内容である。コーエンは自らの論立てにおいては、この主張を中心に据えるところの、「生き易さへの接近条件の平等」（equality of access to advantage）化と名指す見解を提起している。その見解は自己所有権に依拠した能力把握を端的に斥ける内実であり、いわば「能力の共同性」——さまざまなひとのさまざまな能力を行使して生じる便益を、各人にとっては基本的な生活の幅・生き易さに接近するために、共に利用し得る関係を志向する、という含意での、能力利用機会の共有・共同性——という把握に依拠した平等主義的正義志向の展開を、ねらうものである。

### 《ろ》 “真価” (desert) をめぐって

正義の在り方を探求する議論の出発点としては平等が据えられるべきだ、ということが了解されたとしよう。その出発点から後の各人の行為の軌跡が、平等ならざる処遇を規範的に採り込むべきことになるだろう。この脈絡においてもっとも鮮明に論立てしようとするのが、各人の行為蓄積の軌跡の相違に応じて各人の“真価”が（もしくは“功績”が）顕現し、それに応じた処遇が、あるいは分配が、なされるべきだ、とする考え方である。

ここで真っ先に取り挙げたくなるのは、ジョン・ロールズによる次の陳述である。

人が意欲的になす努力は、当人の生得的な能力および技能と当人が手にしている選択肢とによって影響されるということが、ここでも明らかだろう。才能や資質において恵まれた人びとが他の条件が同じであれば良心的に努力する可能性は高いだろうし、また彼らのより大きな幸運に関して割り引く方法は皆無であるように思われる。功績に(=真価に……引用者による追補)に報いるという理念は実行不可能である。

[Rawls, John *TJ*: 312 (邦訳改訂版415頁)]

コーエンもこの陳述を採り挙げ、想定される可能性のある二通りの解釈を示そうとした。コーエンによる議論の組み立て方に依拠して、彼のいうところの二通りの解釈への分岐点を、確認しておこう。分岐点として重要な意味を持つのは、上記引用文中の「影響される」という語の捉え方になる。ひとつめの解釈とはこうだ。多大で密度の濃い努力のありようが認められるとして、その努力のうちのどれだけが当人の純粋な精進によるものであるのか——したがってまた、報われるべきなのか——、そして同時に、その努力のうちのどれだけが当人の偶然に持ち合わせ得た幸運によるものであるのか、その度合が特定できぬ様相を以って「影響される」のだ、とする解釈。ふたつめの解釈とはこうだ。謂う所の「影響される」とは、すべてが決定されるという意味だ、とする解釈。この解釈はロバート・ノージックによって、当該脈絡でのロールズの見解の誤りを読み取るべきだという含意を以って、言及され——右派リバタリアニズムによる自己所有権に関する自らの議論を正当化し、ロールズによる平等主義の方向に傾く議論の不整合を批判する論拠として、言及され——、自己労働⇒(世界資源の)自己所有という論理脈絡を組み立てるための核に据えられたのであった[Nozick, R 1974: 214 (邦訳355頁)]。

コーエンは(容易に予想されるように)ひとつめの解釈を支持するのだが、この立場を徹底して尊重する場合には、ロールズによる、「格差原理」こそをもっとも優れた分配的正義の在り方だとする議論の運びにはならないであろう、と論陣を張る。「格差原理」とは、純粋な努力の度合に見合う「真価」を見出そうとする試みをいっさい放棄して、とはいえ、暗黙裡に・説明抜きにメリトクラシーを基底に据えた上で、マキシミン原理とパレート均衡の考え方に依拠することを以って——社会階層上の上位に位置づく者たちにとって(分配上)得られる「基本財」を減じることなく、社会階層上最下位に位置づく者にとって(分配上)得られる「基本財」をもっとも多くすることを以って——、ロールズ流の正義原理の帰結を表わす形式／内容であったのだから。コーエンによる思考脈絡を示す一節を、下に記しておこう。

ロールズの言うことが正しくて、必ずしもすべての努力が報酬に値するわけではない、としよう。しかしだからといって、すべての努力がまったく何の報酬にも値しないとやってしまうのには、無理がある。全体のうちのどれだけが報酬に値するかを計ることが現実には難しいからといって、まったく報酬を与えないという考え方は、正当化できない。努力というものに敬意を表して、たとえば格差原理の設ける必要条件をも通過するような形や根拠を備えた課税体系を通じて、0%と100%の間のどこかの率で

努力に報いることは、できないものだろうか-----。

[Cohen, G.A. 1990 : 364 (邦訳30-31頁)]

上記の引用中にある「格差原理の設ける必要条件をも通過するような形や根拠を備えた」の含意について、補足すると、パレート均衡の考え方を（ロールズに倣って）取り入れるわけではなくて、マキシミン原理を満たす限りで不平等分配を許容するという意味であろう、と推察される。

こうしてコーエンによる思考は、まず何よりも平等分配を出発点に置き、100%正確に決定し得ぬとしても、**妥当性を認め得る限りでの努力の相違に応じた分配的正義の在り方**を探ろうとする方向を採る。ここで記した「**妥当性を認め得る限りでの努力の相違に応じた分配的正義の在り方**」の意味規定について、探求を掘り下げるといふ課題が、自覚されるべきことになる。

上記の課題について、いま取り扱っている論文でコーエンが議論を進展させているわけではない。だが、その課題と関連性を指摘できるであろうと思われる事柄について、次のように言及している。その事柄とは、分配対象を厚生の度合——財から生み出される効用の度合（≡欲求の充足度合）——とする場合に、「高価な嗜好」を持ちその充足に執着する者に向けて、自らの嗜好の形成のありように対して責任を問ひ負わせるべきか否か、という点では、当人に責任を（形成する嗜好を制御するという責務を）負わせるべきであろう、とする見解を基本的には支持している。（とはいえ、なんの留保も無しにというのではなくて、当人にとって制御不可能な部面もあることへの慎重な配慮が、同時に念頭に置かれてもいるのだが。）つまり、意図的・選択的にふるまう行為主体として制御をはたらかせる度合（——それは、報われるにあたいする努力の度合でもある）と、同じく意図的・選択的にふるまう行為主体として責任を負うべき度合とが、相即する内容のこととして言及されている[Cohen, G.A. 1990 : 362-365 (邦訳29-32頁)]。この相即する内容に関しては、出発点として据えられるべき平等分配からの差異化が、まさに妥当性を認め得る限りでの責任の果たし方の相違に応じて、もしくは、報われるにあたいする努力の度合に応じて、なされることが受け容れられる。このようにしてコーエンによる議論から得られる示唆のひとつとして、「責任の果たし方に応じて」を、「報われるにあたいする努力の相違に応じて」と読み替えることができるであろう。

取り扱っている論文での展開の仕方としては、次にコーエンは考察対象を、アマルティア・センによる「潜在能力」概念の意義と限界という点に移している。この点に関しては、既に（(い)）のところで、妥当性を帯びると考えられる解釈の在り方を示した。その最終箇所で言及したところの「能力利用機会の共有・共同性」とは、先ほど述べた「出発点として据えられるべき平等分配」という規範に則るために求められる事柄を、表現したものである。

ここまでの論脈をふまえて、次なる探索の対象を、〈運と責任〉（もしくは〈運と努力〉）をめぐる関係把握のための視軸を確認するところへと、差し向けることにしよう。

#### 《(は)》〈運と責任〉（もしくは〈運と努力〉）をめぐる関係把握のための視軸

世界の事象はそもそも、主として物質界における物理化学的法則性に（あるいはまた、



もう少し広げて自然科学的法則性に) 即した因果必然的決定性に基づいて生起し変化することをふまえて把捉されるべき部面が一方にあり、他方には、主として行為主体としてのひとの、もしくは間柄としての人-間の、意志的意味選択的行為に基づいて創り出し、創り出し損ねる関係の積み重ねから成るところの、いわば自由の在り方をふまえて把捉されるべき部面がある。ひとまずこのように表わしたものの、謂う所の「ひとの、もしくは間柄としての人-間の、意志的意味選択的行為」の存在を確と据え置くことができるのか、に焦点を合わせるならば、ひとの神経刺激の発生のありようおよび神経細胞間での神経刺激の伝播のありようが物理化学的法則性に従い、それゆえ自由な意志的意味選択的行為の余地はあり得ない、とする堅固な決定論 (hard determinism) が息づく余地を封じ切るのは、容易ではない。哲学上のアポリアとして古来語り継がれてきた、決定論 vs 非決定論がここに浮上し、論の構築に纏わる重苦しさが意識される。ひとの行為を対象として、それに深く関与するであろう〈運と責任〉(もしくは〈運と努力〉) をめぐっては、どのような視座から考察することができるのであろうか？

まず、ひとの行為は(堅固な)決定論に従って把握し尽くせるとするならば、行為に責任の余地は(努力の余地は)あり得ない。そこに依拠して分配的正義の在り方を探るとすると、完全な平等分配だけが正義になる。次いで、ひとの行為に全面的な自由意志による選択や創出が可能だとみる立場に立つと、外的環境要因がもたらす、行為に対する負荷のありようと、意味志向性を帯びた行為との関連動態を考慮に入れた調整を施しつつであるが、行為の責任の帰属を(努力のありようを)識別することは困難ではなくなるだろう。

ひとの行為について責任の帰属を、そしてまた責任の度合を、立ち入って考察するためには、普遍的な真理確定を急ごうとする、決定論vs非決定論のいずれを探るべきかという水準での形而上学に固執するのは、ふさわしくない。むしろ、運の作用と責任の果たされ方との(運の作用と努力のなされ方との)絡まり合いを、なんらかの、妥当性を認め得る正義の基本視座に拠って立つことを以って、解きほぐそうとする試みがなされるべきであらう。拠って立つべき基本視座としてまず候補に挙がるのは、〈運の平等主義〉だ。

正義の実現をめざして〈運の平等主義〉が選び取ろうとする思考の筋道とは、ひとの行為自体(——そこには、行為を生み起こす動機も含まれる、とする)と行為の帰結に関して責任の帰属と度合を、できる限り妥当性を帯びる内実を以って見出そうと努め、見出された結果に応じてひとの処遇を(全体社会のまとまりにおいて)決めようとする。同時に、行為に関する責任の帰属と度合を見出そうとするに際して、運の作用への鈍感で妥当性を欠く想念をできる限り避けるために、運の作用と責任の果たされ方との絡まり合いの内実に敏感であらうと努める。そのような思考の筋道である。想像されるように、この思考の筋道を実践しようとする場合には、大きな困難が随伴する。選び取られるべき思考の筋道に則っているか否かの判別基準が、単純な基準ではないからである。とはいえ、不可能な実践であると片づけるとすれば、それは早計であらう。

上記の思考の筋道を実践する場面を、ここで採り挙げてみよう。その場面というのは、運の作用と責任の果たされ方との絡まり合いの内実を、行為への制御の在り方を媒介にして解き明かそうとするひとつの試論として、アーサー・リプシュテインによって組み立てられた議論の中に見出される。その議論<sup>3)</sup>は、「私」による外見上は単純に明確な性質を帯びた制御の及ばないとみなされがちところで生じた出来事によって、「あなた」が軽

視し難い害を被った、という事態に対して、どのように責任が帰属させられるべきなのか、という問いをめぐるものである。より具体的な場面設定はこうである。一方で「あなた」は住宅地の通りを、仕事のことを気かけながら歩いているときに、他方で「私」は屋根の修理をしている。修理事業上の必要性から、釘の入った箱に手を伸ばした時に、不安定な足場のせいもあって、「私」による自らの身体動作への十全な制御を欠いて「私」は不注意に、近くに置いてあったハンマーを蹴ってしまった。そうして屋根から蹴り落されたそのハンマーが、「あなた」の頭を直撃した。この事態に向けて、どのような理由づけのもとにだれが責任を負うべきなのか？ この問いへの応答としてリプシュテインは、たとえば「私」の明確な制御の及ばぬところで——不運の要素が多かれ少なかれ介在したところで——ハンマーの落下が生じたのであったとしても、「私」への責任の訴求がなされ得るし、なされるべきでもある、とする。

ここにあげた例示からは、ひとの行為に向けての制御の度合を問おうとする際に、行為自体や行為の帰結に運の作用が介入する点に問題化の焦点を合わせる必要性に、気づくことができる。運の作用の介入を無視できないことは、一般に出来事の生起や帰結という面を対象化する時には比較的と言って意識化されやすいが、ひとの行為や行為の帰結という面を対象化する場合にも、当て嵌まることである。件の例示における「私」が屋根の修理をしようと決意し、その後の修理事業過程で釘箱に手を伸ばした拍子に意図せずしてハンマーを蹴ってしまった、という事態。この事態を構成する「私」の諸行為の中に運の作用を見出すのは、困難ではないだろう。

翻ってここで、より一般化された規範的思考の方向づけを求めて、考えてみよう。それへの制御の度合を検討するところの対象となる行為に、運の作用が見出されるということは、対象となる行為に向けての制御が十全ではないということだ。これは、いまここで取り挙げている例示に限られたことではなくて、一般性を帯びて認識され得る。なんらかの行為のまとまりを作動させる意識の働きという面からも、身体能力・機能という面からも、行為者本人にとっては制御し尽くせない運の作用が介入してくるということが、一般的に認められるだろう。

いま述べた、一般化された認識を踏まえつつも、思考の対象として取り挙げた事例について重要視されるべきなのはということなのか、リプシュテインに導かれつつ、さらに立ち入って考えてみよう。責任の訴求は、十全で明確な制御のある行為者が為していたかどうか、というところからのみ行なわれるべきなのではない。そうではなくて、むしろ、イマヌエル・カントによる定言命法の定式のひとつとしての、「たんなる手段としてではなくてつねに同時に目的として遇されるべき他者」に向けて、換言すれば、つねに平等な関心と尊重を以て配慮（気づかい）の対象とされるべき他者に向けて、実的に払われるべき配慮という規範から、行なわれるべきなのだ[Ripstein, Arthur 1994 : 6-10]。運の作用との絡まりによって混迷化しがちな、ひとの行為の負うべき責任についての帰属のさせ方をめぐって、規範的思考の筋道がどのように築き上げられるべきなのか、この点を解明しようと試みるにあたって、リプシュテインによるこのような規範的方向づけが、大いに示唆を与えてくれるように思われる。

### 《(に) 無責任な行為の結果への対処原則

次に、ひとの行為が他者に害を与えたとともに自ら自身にとっての害を引き起こした、という場面を考えてみよう。より具体的には、無謀な——運転者として負うべき責任意識を欠いた——運転を行なう自動車運転者が事故を起こし、その事故に巻き込まれたところの、(もうひとりの) 運転者としての規範を遵守し責任を十分に果たしていた他者に、軽傷を負わせ、自らは瀕死の重傷を負った、という場面だ。しかも当の運転者は自動車保険に(自動車損害賠償責任保険にも他の任意加入の保険にも) 加入していなかった、という場面を。この事故自体における運の絡まり合いについての条件設定としては、当の無謀運転者は無謀さを避けて事故を防ぐための気づかいを行なうことができた(気づかいを不可能にするに足る運の作用が認められなかった)、このような設定である。その事故発生後の時点では救急発動して病院へ搬送するための自動車が一台しかなかった、と仮定しよう。この場面への対処のあるべき姿はどうかと考えるか? 〈運の平等主義〉に拠って立つ思考の筋道からは、責任を果たしていた軽傷者を救急車で救急対応可能な病院へ運び、瀕死の重傷者を放置するべきだと、そしてなおかつ、事故発生直後だけでなくその後も病院での治療を受けるために搬送する必要はないと、迷わず考え、そのように対処しなければならない。

上記の対処事例は、〈運の平等主義〉に向けて強い敵意を持つ立場から〈運の平等主義〉のもつ“過酷な対処”の例として非難がなされることが多かった。ここでこの非難が妥当性をもつのか否かについて、検討してみよう。それぞれの行為者の責任の果たし方にこそ敏感であろうとするのが、〈運の平等主義〉の核心である。ここで併せて考慮されてよいのは、上記の対処を行なうことが、無謀運転者以外のひとたちに何らかの不利益を与えることになるのかどうか、という点だ。この意味脈絡での不利益が生じることが無ければ、上記の〈運の平等主義〉による対処が“過酷な対処”の例として非難されることは、甚だ妥当性を欠いている。

### 《(ほ) 責任の訴求に複雑さと困難が深まる事例

運と責任との交錯にどう向き合うか、を論じて来たわけだが、こうした議論の脈絡に位置づきはしても、責任の訴求がいつそう複雑で困難な場合について、リプシュテインによる議論[Ripstein, A. 1994: 13-14]の中から取り出して論じておこう。

対象とするのは、第一次的には、不注意による出火に伴う損害に対する責任を誰に負わせるべきか、という事柄をめぐる、実際に起こった事件とそれについての訴訟結果(判決)である。そして第二次的には、その事件と判決に関連づけて、リプシュテインが責任の帰属先を問うにあたって提起している論点である。ヴォーガンとメンラヴはその所有する地所を隣接する、いわば隣人である。メンラヴは自らの地所の端の所に——ヴォーガンの地所のすぐ近くに——(彼の暮らしの中で必要なものであった) 干し草の積み重ねを残しておいた。その干し草のすぐ近くにはヴォーガンの所有する納屋が建っていた。時間の経過するうちにその干し草のところから出火し、ヴォーガンの所有する納屋を全焼させることになった。またメンラヴは、干し草が時間経過の内に火出し易い性質を持つことを理解するに足る知性を持ち合わせていないことも明らかであった。ヴォーガンは自分の納屋の損害を償わせるように裁判所に提訴し訴訟事件となった。メンラヴの弁護人はメンラヴ



の知性の状態に認められるべき不運のことを強調して弁護した。実定法としての不法行為法に依拠した判決としては、ヴォーガンの訴えが受け容れられ、メンラヴ側の抗弁は受け容れられなかった。リプシュテインはしかし、その判決によってではメンラヴにとっての不運が妥当性を認め得るかたちで取り扱われていないのではないかと述べることで、責任の帰属させ方についてさらに問い深める必要性のあることを喚起しようとしている。この事件をめぐる責任の帰属とその度合に関して、リプシュテインによる最終的な結論が示されているわけではない。ヴォーガンを不運のままに留め置くのではなく彼への損害賠償はなされなければならない。とはいえ、メンラヴの不法行為にのみ帰責させて終わることは、“標準化された知性をメンラヴが備えていないがゆえに彼は罰されなければならない”とする妥当性を欠く意味づけが持ち込まれることだ。メンラヴの知性に纏わる不運を、むしろかわり合うひとたちの間で分かち持とうとする規範的な思考が、具象性を帯びた方策を以って立ち現われること。そのことを促す方向の試みが必要となるであろう。

## 〔β〕正義の構成要素を再考する

### （（へ））パレート均衡とロールズ流「格差原理」

運の作用との交錯の中でも責任の帰属および負うべき責任の度合を見出すことの可否について、議論の方向は二つに分かれる。それを可能だと見るところから組み立てられる議論のひとつの重要な例として、先に言及したリプシュテインの議論が（とりわけ（（は））で例示した場面に即した議論が）念頭に置かれてよいだろう。それを——責任の帰属および負うべき責任の度合を見出すことを——不可能だと見るところから組み立てられる議論の代表的なひとつの例として、ジョン・ロールズによる、「格差原理」というかたちに分配的正義の実現形態を見定めようとする議論<sup>4)</sup>（刑事上の責任を探るという論脈ではなく、基本財の分配をめぐる正義に関係する責任の度合の特定を回避する、という論脈での議論）がある。

具象相で考えるとすれば、労働力市場での価値形態として規定される各人の所得を再分配するに際して、何よりも重要視してめざされるべきなのは何か、という問いに対して、所得のもっとも低い層が再分配後に得られる財の量を最大化すること、という回答を以てする議論だ。市場での価値形態の定まり方が各人の責任の果たし方の度合によって測定された結果ではなくて、運の作用が大きく介在した結果だということ。責任の果たし方を正確に見定めることができない、とする思念が、同時にここで作用する。その上でめざされる結果として想定されるひとつの候補としては、結果の端的な平等という財の分配が考えられてもよいだろう。とはいえ、結果としての端的な平等を再分配の目標とする時には、市場での所得上位層にとっての減損が大きくなり、そのひとたちの社会的生産への貢献意欲が——誘因が——低下する。それは延いては、所得最下位層にとって再分配後に得られる利得を減じることになる恐れが大きい。それゆえに、所得上位層の利得を減じることになる再分配は、選択肢から除外しなければならない（——パレート均衡の保持）。そのように辿った後に行き着くのが、“もっとも暮らし向きの恵まれない者たちにとっての利得の絶対量を最大化する分配”というマキシミン原理に従うかたちでの「格差原理」なのだ。それはまた、暮らし向きのもっとも恵まれない者たちへの優先的な再分配という

面に焦点を合わせると、「優先順位重視主義」prioritarianismと言い表わすこともできるだろう。

こうしてロールズ流「格差原理」から抽出できそうな、正義の構成要素として、“もっとも暮らし向きの恵まれない者たちにとっての利得の絶対量を最大化する分配”（——マキシミン原理）と暮らし向きのもっとも恵まれない者たちへの優先的な再分配を優先させる「優先順位重視主義」を見出すことができる。

### 《と）責任への敏感なる反応と不効率性回避の原則

前項（《へ））で採り挙げたのと同様の、所得再分配の場面を、もう一度考えてみよう。ただしここでは、各人の責任の果たし方の度合を見定めることが可能だ、と仮定する。さらにまた、各人の労働力市場で獲得する財の量が当人の責任の果たし方という度合を基準にしてより多いか、等しいか、それともより少ないか、が判明する、と仮定しよう。この場合、正義に適う再分配は、財の再分配結果が責任の果たし方度合に、相対性尺度において正確に対応するものとなるべきであろう。そのような再分配になんらかの弱点が、しかも正義を求める視座からの弱点が、指摘されるであろうか？ これは果たして重大な問いかけ足り得るのだろうか？

上記の問いかけが無視し得ない重要性をもつ、と論じるのが、カール・ナイト [Knight, Carl. 2009: chap.6] である。ナイトによる議論の趣旨は、責任への敏感なる反応のみを以ってしては、もっとも暮らし向きの恵まれない者たちにとっての、絶対的尺度からの利得を——相対的關係のならざる、財の絶対量を——最大化する分配を実現し得なくなるのであって、それは財の生産と分配にとって不効率を生み出すことになり、そのような帰結は避けられなければならない、というものだ。このような趣旨に関連させて、ナイトは、前項で述べたマキシミン原理および「優先順位重視主義」を基底に据える立論を試みている、と筆者には推測される。

上記のところから、ナイトはロールズ主義者だということになるのか。そうはならないであろう。当人の責任の果たし方についてその度合を、単純ではないにせよ、見定めることを不可能だとは見做さないのだから。ナイトによる主張は、責任への敏感さとともに、その敏感さを大きくは減殺しない方法で、財の生産と分配にとっての不効率を避けるという分配方策上の工夫を探るべきだ、とするものなのだ。自らの理論上の立場を運の平等論の陣営に自覚的に位置づけさせようとするナイトは、しかしながら、運の平等論が責任の度合に敏感であろうとするあまりに、前段落で言及した「不効率」をもたらす傾向を帯びるところに、その弱点を見て取ろうとする。

上記の発想に基づいてカール・ナイトが自らの主張をほぼ結論づけるかたちで述べている内容を、次に挙げておこう。

責任を考慮し応じようとする制約条件を備えた優先主義の持つ、責任尊重性に関わってもつ構成要素について、私の支持している見直しとは、(3\*)、すなわち、制限された責任尊重主義、と呼ばれてよいのかもしれない。その見直しは、(f) と (g) を欠くのだが、責任の果たし方のより少ないひとたちよりも果たし方のより多いひとたちに向けて取り計らわれる、辞書編集方式上の優先性から成る諸規則の十全なる配

列を、有している。制限された責任尊重主義という基本的な意図は、次のようである。すなわち、なんらかの価値ある事物をひとに、その事物を与えられることに対応する責任をそのひとが果たしていないのだが、与えることが、不利な結果を誰に向けてももたらさない場合には、その与えることが許容されるが、不利な結果を少なくともひとりのひとにもたらす場合には、責任を果たしている度合に対応した、価値ある事物の受け取りがなされるべきだ。責任尊重主義についての、上記の斜字体（かつ下線）箇所での但し書きは、もしそれが無いならば、責任を考慮し応じようとする制約条件を備えた優先主義が、誰ひとりにも利益を与えないという仕方では厚生を減してしまう、というそこまでの理由を持ち合わせるようになってしまうから、必要になるのである。

(1) と (2) と (3\*) とが一緒に合わせられることによって、分配的正義についての大きい魅力的な説明をかたちづくることになる。[Knight, C. 2009 : 224]

ここに、上記引用中に出てきた (1) と (2) と (3\*)、および、(f) と (g) を補記しておかなければならない。

(1)：責任に関する考慮を為している優先主義のひとに供給する厚生もしくは効用が大きくなればなるほど、それだけ利得の持つ道徳上の価値は大きくなる。

(2)：責任に関する考慮を為している優先主義に基づいてひとが何らかの利得を得るとして、その利得獲得時よりも前の、そのひとの生きてきた間に持ち合わせた効用もしくは厚生<sup>①</sup>の度合が低い度合であればあるほど、それだけ当の利得の持つ道徳上の価値は大きくなる。

(3\*)：制限された責任尊重主義のこと。すなわち、なんらかの価値ある事物がひとに、その事物が与えられることに正確に対応する度合の責任をそのひとが果たしていないのだけれども、<sup>①</sup>与えられることが、不利な結果を誰に向けてももたらさない場合には、その価値ある事物の全体を与えることが許容される。<sup>②</sup>与えられることが、不利な結果を少なくともひとりのひとにもたらす場合には、責任を果たしている度合に正確に対応する度合で、価値ある事物の受け取りがなされるべきだ、とする考え方のこと。

(f)：暮らし向きの上では有利なのだが、責任の果たし方度合が比較的少ないひとたちに向けて、不利な処遇を行なうことは、そのひとたちに向けて有利な処遇をすることよりも（もしくは、そのひとたちの暮らし向きの現状を維持する処遇よりも）、優先性をもつ。

(g)：暮らし向きの上で不利なのだが、ひどく怠惰なひとたちに向けて、不利な処遇を行なうことは、そのひとたちに向けて有利な処遇をすることよりも（もしくは、そのひとたちの暮らし向きの現状を維持する処遇よりも）、優先性をもつ。[Knight, C. 2009 : 217, 220, 224]

これらの全体をふまえて考える時、カール・ナイトによる主張は分配的正義の在り方として妥当なものなのだろうか？ ナイトによって留意を強く促されるところの不効率性は——責任/運への敏感さにこそ拠って立とうとする、〈運の平等主義〉の核心のみに頼ると、そこに帰結として発生するとみなされるところの、分配される財の絶対量の低減は——何故にもたらされるのか？ この点についてナイトが明示的に述べているわけではないが、おそらく、生産性の高いひとの、生産活動に取り組むに際しての誘因の衰弱ということが、前提となる想念として受容されているからであろう。これは、ロールズによる格差原理の

導入においても前提となった想念である。そのような想念はしかし、ひとびとの正義感覚における覚醒を経て、脱することのできるもの——その可能性を否定できないもの——と考え直し実践する筋道を、あらためて擁立できるのではないだろうか。

このように考え進めることによって、規範理論の妥当な在り方としてはどうか、という観点からは、ナイトによる主張にはそれを支持させるに足る十分な論拠が完備されているわけではないこと、そのことを指摘できる。

**《補記》 運の平等主義を挫折させようとする誘惑力としての、ひとの活動意欲にかかわる心理法則……“不充足理由の原理”(principle of insufficient reason)と結びつけて**

ロールズによる格差原理を立ち上げさせるに到る思考の基準は、いったいどのようなものだったのか？ 複雑性もしくは曖昧さを避けられない「原初状態」の中で、何故にひとは正義の第一原理と併せて、第二原理の特に格差原理に合意点を見出す、という議論の構築がなされるのか？ この論題に向けて筆者は、未だ十全な解明を為し得ていない。いまこの段階で、その解明につながるであろうと期待することができそうな視軸を、ここに書き留めておこう。

『正義論』第三章「原初状態」中の第27節「平均効用原理にいたる推論」、第28節「平均原理にまつわるいくつかの難点」、第29節「正義の二原理を支持するいくつかの主要な根拠」において、かなり重要な意味を持たせて用いられていると思われるのが、「不充足理由の原理」(principle of insufficient reason)である。ロールズがこれを一度は持ち出しはするが、最終的にはその積極的受容を拒むことについて、そのことの趣意を推察すると、次のような事だと思われる。すなわち、全体社会の分業協働体系において諸地位の階層構造を自明視した上で、原初状態に於いて分配的正義のあるべきかたちを決めるために参集している者たちにとっては、各人がいずれの階層的地位になるかが未知の状態であり、しかもいずれの階層的地位になるかについては推定し得ず、したがってその確率上の確からしさをほぼ同様に捉えておかなければならない事（——これが、「不充足理由の原理」を考慮する主要な脈絡）。無謀な賭けに出るのを避けようとする事。さらにまた、(ロールズがこの書の第三部「諸目的」の所で幾度か持ち出すところの)“人間心理の一般的事実”や“(利己的な)個人の合理的選択の原理”という語が醸し出す現実感覚に依拠しようとする事。それらに加えて、暮らし向きの恵まれぬ者たちに——各人の具え持つ生産性に纏わる状況に運の作用(恣意的偶有的な作用)が介入することによって出来る、階層的諸地位の中での各人の位置づけの上で、低位に置かれる者たちに——優先的に財を分配することの効果を、考慮に入れる事。これらの総合的効果が、「不充足理由の原理」への部分的配視および最終的な距離の採り方（——積極的受容を拒むこと）という含意を以って、組み合わされることによって立ち現われるのが、格差原理なのであろう。

註

- 0) Cohen, Gerald A. (1990) Equality of What? On Welfare, Goods and Capabilities, *Recherches*

*Economiques de Louvain* 56 pp. 357-382

この論文の邦訳が、マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン（竹友安彦監修・水谷めぐみ訳）『クオリティー・オブ・ライフ』（2006年 里文出版）に収載されている。

- 1) “Equality of What?” と題して1980年に発表された論文（*The Tanner Lectures on Human Values*, Vol. 1, Cambridge University Pressに収載されたもの）。この邦訳が、アマルティア・セン（大庭健＋川本隆史訳）『合理的な愚か者』（1989年 勁草書房）の中に収められている
- 2) 平等化の指標についてのセンによる新たな知見に刺激をうけつつ、コーエンの提示した視角を、端的に表示する語。
- 3) ここに取り挙げた、思考実験としての事例は、[西口2019: 22-23]において提示した事例と同一のものである。この事例に即して考察する叙述も、いま挙げた拙稿でのそれと、ほぼ同様である。
- 4) メリトクラシーを前提としながらも、生産活動を軸にした社会的互惠という関係を促すために、優先主義およびパレート均衡を取り込んだかたちで、分配的正義の原則とする議論。

## 文献

Cohen, G. A. (1989) “On the Currency of Egalitarian Justice”, *Ethics*, 99

Cohen, G. A. (1990) “Equality of What? On Welfare, Goods and Capabilities”, *Recherches Economiques de Louvain*, 56

(→G・A・コーエン2006年（水谷めぐみ 訳）「何の平等か？ 厚生、財、潜在能力について」（マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン編著、竹友安彦監修『クオリティー・オブ・ライフ』里文出版、所収）

Knight, Carl (2009) *Luck Egalitarianism*, Edinburgh University Press

Nozick, Robert (1974) *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books Inc.

(→ロバート・ノージック 1985/1989年（嶋津格訳）『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社）

Rawls, John (1999) *A Theory of Justice (Revised Edition)*, Oxford University Press

(→ジョン・ロールズ 2010年（川本隆史・福岡聡・神島裕子訳）『正義論 改訂版』紀伊国屋書店）

Ripstein, Arthur (1994) “Equality, Luck, and Responsibility”, *Philosophy and Public Affairs* vol.23, no.1

Sen, Amartya (1980) “Equality of What?”, S. McMurrin(ed.) *Tanner Lectures on Human Values*, Vol.1, Cambridge University Press

(→アマルティア・セン1989年（大庭健・川本隆史訳）「何の平等か？」（アマルティア・セン（大庭・川本訳）『合理的な愚か者』勁草書房、所収）

Sen, Amartya (1985) *Commodities and Capabilities*, North-Holland

(→アマルティア・セン1988年（鈴木興太郎訳）『福祉の経済学——財と潜在能力』岩波書店）

Sen, Amartya (1993) “Capabilities and Well-Being”, Martha Nussbaum and Amartya Sen(ed.), *The Quality of Life*, Clarendon Press

(→アマルティア・セン2006年（水谷めぐみ訳）「潜在能力と福祉」（マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン編著、竹友安彦監修『クオリティー・オブ・ライフ』里文出版、所収）

西口正文2019年「責任もしくは功績に感応する正義」（『人間関係学研究』第17号、17-28頁、所収）